

令和3年9月10日 メルボルン交流抄

宇宙飛行士・毛利さんお勧めの世界地図

今年1月、東京お台場の科学未来館を訪れて、当時館長でおられた毛利衛（まもる）さんにお会いした話は以前ここでもご紹介しました（2021年5月24日）。その時に、毛利さんが、世の中の皆様には是非知っていただきたいと仰っていたものがあります。それがオーサグラフ（AuthaGraph）の世界地図でした。

これは1999年に建築家鳴川肇氏らによって考案されました。地球のあらゆる陸地の形と大きさをほぼ正しく表し、陸地と陸地の関係を遮断することなく綺麗に長方形の枠に納めた地図です。その地図の裏面には、毛利館長からのメッセージとして、次のように記されています。

「スペースシャトルから見た地球は、どちらの方向に飛んでも終わりのない、球の表面でした。このことを端的に表しているのがオーサグラフ。どこにも中心がなく、しかしどの場所も中心になれる。多様な視点を与えてくれる地図です。このオーサグラフが学校や家庭に届き、教育用に活用されることは、とてもうれしいことです。」
（以下略）

昔、学校でメルカルト法による世界地図を習い、世界のイメージはそこから始まりました。南極は世界の下に横に伸びた巨大な陸地として描かれていました。



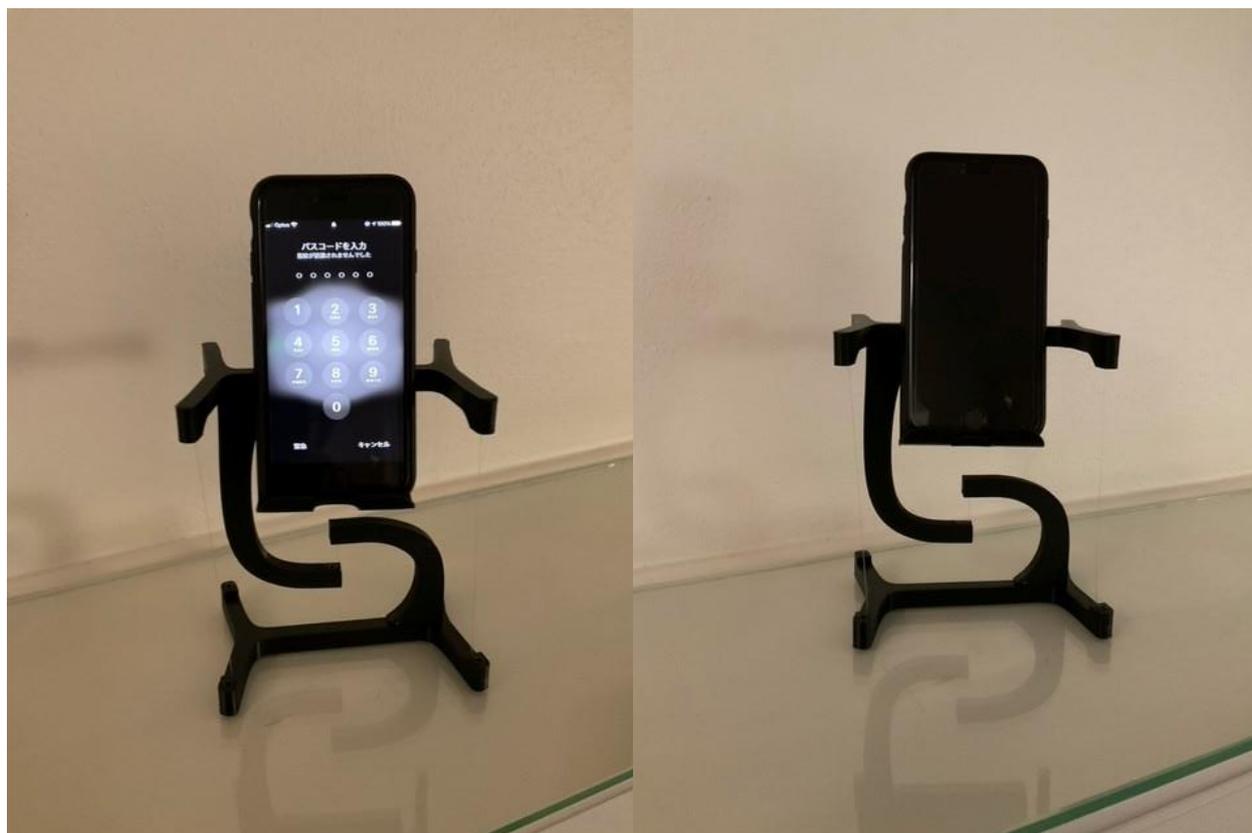
総領事館内に展示しているオーサグラフ

なかなかわかりにくいかもしれませんが、機会があれば是非実物を見に総領事館にお立ち寄りください。日本からのお土産としてオーストラリアの政府関係者や教育関係者、メルボルンの日本人学校や補修校にも寄贈しています。

先般、オーストラリアのある科学の権威である政府要人を御夫妻で公邸での食事会にお招きしました。その際、ここぞとばかりに、オーサグラフをお渡ししました。彼は、これまで見たことがない、画期的な世界地図だ、と言って非常に喜んでくださいました。

そして、彼が私へのギフトとして持ってきてくださったのが、tensegrity (tension と integrity との造語)に基づく携帯電話のホルダーでした。よく見ていただくと、ホルダーが宙に浮いているように見えます。釣り糸だけで引張る力と圧縮する力を均衡させれば、不思議なことに立ち上がります。文系の私には理解できないのですが、このやり方で人が使える椅子やテーブルも作ることができるそうです。

ちなみに、この造語を考え出し自らオブジェを製作したのが、米国の思想家で建築家でもあったバックミンスター・フラー(Buckminster Fuller) という発明家です。



このフラー氏は毛利さんから頂いたオーサグラフの裏面の説明の中で、1946年にダイマキシオン・マップ (Dymaxion Map) という陸地の位置関係を正しく表そうとした地図を考案した建築家と紹介されています。このダイマキシオン・マップがオーサグラフの起源のようなものです。

全く意図せずに交換したギフトが同じ建築家の発想に由来するというのは、少し驚く偶然でした。

いずれにしても、この地図を見れば各国の位置関係がよくわかります。日本から中南米に行くのになぜマイアミやテキサスで乗り換えるのか、それが最短だからということが一見してわかります。また、オーストラリアから見れば、日本は東海岸の北に位置し、インドは西海岸の北（あるいは北北西）に位置します。インドはもっと西にあると思いがちですが、そうでもないことがわかります。

毛利さんお勧めの世界地図、これからも活用させていただきます。

島田順二